令和八年度
第四十二回　青少年の主張矢祭大会
作文集

矢祭町青少年育成町民会議

開　催　趣　旨

矢祭町は、「元気な子どもの声が聞こえるまちづくり」を基本理念に掲げ、行政、議会、町民がそれぞれの役割を果たしながら、独立独歩のまちづくりを進めていくことを誓っています。恵まれた自然環境の中で、夢を持って子育て・子育ちが出来る風土こそが矢祭町の誇りであります。

青少年の主張大会は、矢祭町の未来を担う子供たちが、自分たちの抱える未来への想いを発表する場です。その強い想いを、行政、議会、町民がそれぞれ真摯に受け止め、これらからのまちづくりに対する責任を再確認する場でもあります。

未来を担う子どもたちの成長を見守りながら、これからの矢祭町に思いを馳せる、そんな場になって欲しいと願っています。



【目　次】

第四十二回青少年の主張矢祭町大会

「小学生の部」

☆日々から未来の健康へ　矢祭小学校五年　鈴木　心望・・・4

☆ぼくのマラソン　矢祭小学校五年　藤田　大雅・・・6

☆なりたい自分になるために　矢祭小学校六年　佐久間　優叶・・8

☆手伝いから学んだこと　矢祭小学校六年　髙澤　蓮太郎・・10

「中学生の部」
☆ＡＩとの正しい向き合い方　矢祭中学校一年　髙信　実瑶・・・12
☆国際協調のためには　矢祭中学校二年　植田　結菜・・・14
☆「頑張る」ということ　矢祭中学校三年　本田　瑛士・・・16
「高校生の部」
☆挑戦と勇気　福島県立白河高等学校一年　鈴木　悠人・・・18

☆ＡＩ時代に学ぶ意味
学校法人石川高等学校一年　菊地　心絆・・・20
☆ふるさと
福島県立光南高等学校二年　熊田　紗也香・・22
「英語弁論」
☆Beyond the Soccer Field　矢祭中学校三年　増子　琉愛・・・24
（発表順に掲載しています）



日々から未来の健康へ

矢祭小学校　五年　鈴木　心望

私は、何歳になっても健康に生きていくためには、今から健康について考え、行動することが大切だと考えます。

私が健康について考えるようになったきっかけは、年齢を重ねると病気になったり、体の機能がおとろえたりすることを知ったからです。年を取ることは、誰にでも起こることです。しかし、年齢を重ねることをただ待っているのではなく、今からできることを続けていけば、健康な生活につなげられるのではないかと思いました。

そこで私は、健康に生きるために大切なこととして、三つあると考えました。一つ目は老化への対策、二つ目は運動、そして三つ目は食事です。

一つ目の老化への対策として、頭を使うことが大切だと考えました。例えばゲームなら、ただ画面を見るだけでなく、自分で考えながら遊べるものがあります。マインクラフトのように、材料を集めながら何を作るか考えたり、どのように作ればよいか工夫したりするゲームがあります。また、パズルゲームのように、次にどの形を置けばよいかを考えて遊ぶゲームもあります。このように、遊びながら頭を使うことも、頭の働きを保つために役立つのではないかと思います。

もちろん、ゲームだけをしていればよいというわけではありません。本を読んだり、家族と会話をしたり、新しいことに挑戦したりすることも大切です。大切なのは、毎日の生活の中で「考える」ことだと思います。

二つ目は、運動です。運動は体を健康にするだけでなく、気持ちを前向きにすることにもつながります。毎日元気に体を動かすことができれば、体力を保つことにつながります。

しかし、私のように、運動が苦手な人もいると思います。だからこそ、無理をするのではなく、自分にできることから始めることが大切だと思います。例えば、歩く時間を少し増やしたり、ストレッチをしたり、外で友達と遊んだりするだけでも良いと思います。少しずつでも続けていけば、それが大きな力になると思います。

三つ目は、食事です。私は体を作るためには、毎日の食事がとても重要だと思います。特に、主食・主菜・副菜など、いろいろな食品をバランスよく食べることが大切です。私は、和食について学習したとき、主食に加えて、魚や肉などの主菜、野菜

などの副菜を組み合わせることで、栄養のバランスを考えた食事ができることを知りました。毎日することだからこそ、一回一回の食事を大切にすることが、将来の健康につながるのだと思います。

また、食事も運動と同じように、毎日の小さな積み重ねが大切です。「今日は疲れたからなにもしない」ではなく、できることを少しずつ続けることが、未来の自分を助けることになると思います。

私はまだ小学生なので、将来の健康について考えるのは早いと思う人もいるかもしれません。しかし、健康な生活習慣を身につけることに、早すぎることはないと思います。今の自分の生活が、何十年後の自分の体や心につながっていくからです。

これから私は、毎日の生活の中で頭を使うこと、体を動かすこと、そしてバランスのよい食事をすることを意識していきたいです。そして、自分だけでなく、家族にも健康の大切さを伝えていきたいです。

未来の自分が健康で、毎日を楽しく過ごせるかどうかは、自分の行動にかかっています。「まだ大丈夫」と思うのではなく、「今からできることは何だろう」と考えて行動することが大切だと思います。今日からできる小さな努力を積み重ね、何歳になっても元気に生活できる自分を目指していきたいと思います。





ぼくのマラソン

矢祭小学校　五年　藤田　大雅

ぼくの夢は、世界一のマラソン選手になることです。日本はもちろん、世界で通用する選手になるのが目標です。そのために、ぼくは毎日一生けん命がんばっていることがあります。

ぼくが何より大事にしているのは、毎日の練習です。マラソンといっても、ただ長いきょりをがむしゃらに走るだけではありません。短いきょりを何本も走ってスピードをきたえる練習や、一定のペースを守って決められたきょりを走りきるペース走など、日によって練習の内容を変えて取り組んでいます。自分の得意なことだけでなく、足りないところをしっかりとおぎなうために、毎日の練習に工夫を重ねています。

五年生になってから、ぼくは陸上のクラブチームに入りました。そこでは、かんとくがぼくたち一人一人の体力や目標に合わせて、一番合った練習メニューを考えてくれます。かんとくが教えてくれる練習は、どれも大切なものばかりです。

だからこそぼくは、かんとくが決めてくれたメニューは、どんなことがあっても絶対にクリアできるように強い気持ちで取り組んでいます。しかし、時には体が重くて調子が悪い日や、雨や風が強くて苦しい日もあります。そんな時は、心が折れそうになり、自分の中の弱い気持ちに負けそうになることもあります。

そんな時、ぼくはいつも自分に問いかけます。「ぼくは何のために陸上をやっているのだろう。」そうやって、自分が大きくなったら世界一になるという強い目標を思い出すと、もう一度前を向いて走り出すことができます。そうして毎日あきらめずに走ってきたおかげで、最近では少しずつ自分の自己ベストをぬりかえることができるようになってきました。きつくて苦しい練習を乗りこえた先に、新しい記録が出たしゅんかんのうれしさは言葉になりません。自分の努力は一つもむだになっていないのだと、心から実感できるしゅんかんです。

また、今年は走る練習だけでなく、体を強くするためのほ強運動もしっかりやりたいと思っています。きん力トレーニングやストレッチ、体かんトレーニングも毎日欠かさず行っています。けがをしないしなやかな体を作り、今よりももっと効率よく力強く走れるように、自分の体のケアにも気を配っていきたいです。

こうして毎日練習を重ねる中で、ぼくが思ったことがありま

す。それは、ぼくたちが住む矢祭町には、安心して走れる場所が少ないということです。街灯も少なく、夕方になると外はとても暗くなってしまいます。

だからぼくには、世界一のマラソン選手になることとあわせて、もう一つ大きな夢ができました。ぼくが世界一の選手になって有名になったら、矢祭町のサイクリングロードにもっと街灯をつけて、夜でも安心して走れるようにしたいです。さらに、安全に楽しく走れる周回コースや散歩コースを作りたいです。そうすれば、矢祭町の人たちがもっと運動できる機会が増えて、町全体がもっと元気になると思うからです。大好きな地元にこうけんできるような選手になることも、ぼくの大切な目標です。

そして、練習や夢と同じくらい大切なのが毎日の食事です。「食べ物は体づくりの基本になる」と、前にテレビで言っているのを聞いてから、食べることも大事なトレーニングだと思うようになりました。毎日体を強く、大きくするために、お母さんが作ってくれるご飯を残さずたくさん食べます。好きなものだけでなく、少し苦手な野菜なども残さずに食べます。弟の分まで食べてしまいそうになるくらい完食します。

練習で夜おそくなるときは、温かいお弁当をお母さんが準備してくれます。忙しいはずなのに、いつでもぼくの一番の味方でいてくれます。また、休みの日に朝早くから夜おそくまで、遠くの練習場や大会の会場まで車でそうげいをしてくれるお父さんにも、心の底から感謝しています。そして、「お兄ちゃんがんばれ」とおうえんしてくれる弟の存在も、ぼくの大きなエネルギーになっています。

ぼくがこうして大好きな陸上を思いきり続けられるのは、決して自分一人の力ではありません。家族やかんとく、チームの仲間たちの支えがあるからです。周りのみんなへの感謝の気持ちを絶対に忘れず、ぼくはこれからも自分の夢に向かって、一歩一歩前へ走り続けます。そしていつか、おうえんしてくれるみんなや矢祭町におん返しができるような、世界一のマラソン選手になります。





なりたい自分になるために

矢祭小学校　六年　佐久間　優叶

「大人になったら、何になりたいの？」

そう聞かれるたびに、僕は少し困ってしまいます。僕にはまだ、胸を張って答えられるような具体的な「将来の夢」がないからです。

周りの友達が「サッカー選手になりたい」「学校の先生になりたい」と具体的に夢を語る姿を見て、「今すぐ一つに決めなければいけないのだろうか」とあせったこともありました。しかし、今の僕はこう考えています。「無理に今すぐ一つに決める必要はないんじゃないか」と。

将来の仕事はまだ決まっていませんが、僕には目指したい「なりたい自分」があります。それは、「誰かの役に立ち、『ありがとう』と言ってもらえる人」です。困っている人がいたら話を聞き、そっと手を差し伸べられる人になりたい。人のために行動できる人間になることこそが、今の僕の一番の目標です。

そして、その目標や本当の夢を見つけるために、僕は「今できること」を全力で取り組んでいこうと決めました。たとえば、毎日の勉強です。以前の僕は、「これは将来、何の役に立つのかな」と思いながら授業を受けていました。しかし、国語の授業を通して、読むことや書くことの大切さに気づきました。文章のポイントを読み取って、まずはノートに自分の考えを書いてみる。すると頭の中が整理されて、発表がしやすくなりました。この、整理して伝える力は、大好きな社会の歴史の学習でも役に立ちました。人物や出来事のつながりをノートにまとめたり、資料を読み解いたりするときに文章力が生かされ、歴史がもっと面白くなりました。将来の夢と関係がないように思える勉強も、すべて自分の未来を広げる大切な土台になっているのだと思います。

学んでいるのは、机の上だけではありません。友達と全力で遊ぶこと、スポーツを楽しむこと、そして、「失敗して悔しい思いをすること」すら、すべてが将来へつながっていきます。僕自身、これまで何かをやろうとして思うようにできず、悔しい思いをしたことが何度もあります。しかし、そこであきらめずに練習を重ねたり、やり方を変えて工夫したりすることで、少しずつできるようになる喜びを学びました。最初から何でも上手にできる人はいません。大切なのは、失敗したときに「もうダメだ」とあきらめるのではなく、「次はどうすればいいのだろ

う」と問いかけ、考え続ける姿勢です。

だからこそ僕は、「自分には無理だ」と決めつけるのをやめました。まだやったことがない新しい世界にも、恐れずに挑戦していきます。実際にやってみて初めて、「これは自分に向いている」「これはあまり好きではない」という自分の本当の気持ちが見えてくると思うからです。

これから先、もし心から「これになりたい」と思える本当の夢が見つかったとき、僕はその夢に向かってまっすぐ努力できる自分でありたいです。夢は、見つかったからといってすぐに叶うものではありません。地道な練習や、時にはつらいことを乗り越える強い気持ちが必要です。それでも、本当にやりたいと思えることなら、僕は決してあきらめません。

未来の僕がどんな大人になっているかは、誰にも分かりません。しかし、「あの時もっといろんなことに挑戦しておけばよかった」と後悔する生き方だけはしたくありません。だからこそ、僕は「今」という時間を全力で大切にしていきます。そしていつか、大勢の人の前で、自信をもって「これが僕の夢です」と言える日が来ることを信じて、これからも挑戦し続けていきます。





手伝いから学んだこと

矢祭小学校　六年　髙澤　蓮太郎

五年前、僕の父はこの矢祭町にラーメン屋を開店させた。店を開いた理由は、「今までお世話になった地元に恩返しがしたいから」だそうだ。店の名前は、「蓮の里」という。実はこの名前には、僕と妹の名前の一部が入っている。自分の名前が入った店が地元にあることは、なんだか少し誇らしく、特別でうれしい気持ちだった。

今年の夏休み前、母からこんな提案をされた。

「小さいうちに働く経験をしておくと、大きくなってからためになるよ。お父さんのお店で働いてみたら？」

父に聞くと、

「やってもいいんじゃない。」

と言い、僕も「まあ、やってもいいかな」と軽い気持ちで引き受けることにした。

手伝いの内容は、注文を聞くこと、食べ終わった食器の片付け、そして料理の配膳だ。お手伝いの初日は、たまたまお客さんがあまり来ない日だった。そのため練習にはちょうどよく、思っていたよりも難しくないなと感じた。父は僕のために「見習い中」と書かれた名札を作ってくれた。それを胸につけると、少し大人になったような誇らしい気持ちがわいてきた。

夏休みが進むにつれて、店がとても忙しい日が増えていった。そんな日は、皿洗いに加えて、チャーシュー丼の盛り付けも任された。目が回るほどの忙しさだったけれど、任された仕事を一つ一つこなしていくのは、思った以上に楽しかった。以前父のお店で働いていた母は、僕がお客さんに迷惑をかけていないかずっと心配していた。そして、接客の大切なコツを教えてくれた。

「特に小さなお子さんがいる席に熱いラーメンを出すときは、危険だから、必ず大人の人の前に出すんだよ。」

その言葉を聞いて、ただ料理を運ぶだけでなく、相手の安全や安心を考えることが接客なのだと知った。また父からは会計の時には必ず心を込めて「ありがとうございます」と言うようにと教わった。父は忙しい合間に「助かったよ」と声をかけてくれた。夏休み中の平日は、ほとんど毎日店を手伝った。体に疲れはたまったけれど、やりきった後はどこかすがすがしく、気持ちよさを感じた。そして何より、仕事が終わった後に父が作ってくれるまかない飯がとびきりおいしかった。その味は、頑

張った自分への一番のごほうびだった。夏休みが終わった今でも、僕は週末などにお店のお手伝いを続けている。

この体験を通して、僕は大切なことに気づいた。それは、働くということは、「周りの人のことを思って行動すること」だということだ。店には毎日いろいろなお客さんがやって来る。一人一人に好みや都合があり、いろいろな人がいる。自分の気持ちや自分らしさを出しながらも、その時々でお客さんや一緒に働く家族の様子を観察し、相手に合わせて行動することがとても大切なのだと学んだ。

僕の将来の夢は、まだはっきりとは決まっていない。今はゲームクリエイターやユーチューバーという職業に興味がある。一見すると、ラーメン屋とは全く違う仕事のように思える。けれど、画面の向こうにいるプレイヤーや視聴者という「だれか」のことを想像し、楽しんでもらったり、喜んでもらったりするために工夫するという点では父のラーメン屋での仕事と同じはずだ。父が「地元への恩返し」のために開いた「蓮の里」で得た学びは、僕の中にしっかりと根を張っている。これからも店の手伝いを続けながら、相手の立場に立って行動できる大人になれるよう、いろいろな経験を重ねていきたい。





ＡＩとの正しい向き合い方

矢祭中学校　一年　髙信　実瑶

「夏休みの宿題もＡＩに聞いて丸写しはするなよ。」先生が言います。この少年の主張をはじめとする多くの作文コンクールなどでも、ＡＩを使用した作品は審査対象外になる注意書きを目にします。もしかしたら、私の周囲にもこっそり頼りになるＡＩに宿題をお手伝いしてもらっている人がいるかもしれません。では、ＡＩは使用してはいけないものなのでしょうか。

私は以前、先生と一緒に「少年の主張作文でどんなことを書いたら良いか」をＡＩに聞いてみました。すると、①おすすめのテーマ②文章の構成③好印象を与えるコツの３点が紹介された後、「文章作りや構成についてお手伝いしますよ！」と続きました。ＡＩに質問すると、解答は数秒で返ってきます。これなら課題に向かう時間は大きく削減でき、楽になることは間違いありません。ＡＩは大変優秀ですが、私は少し違和感を覚えました。そもそもＡＩとはどんなものなのでしょうか。先日、学校で情報モラルに関する講演会があり、ＡＩとは人間が脳で行っている「学ぶ」「推論する」「判断する」などの行動をコンピューターで再現する技術だと学びました。文章理解や作成、要約、翻訳、画像作成、データ分析など、様々なことを人間に代わって行えるそうです。インターネット上の数え切れない情報から必要な情報を取り出せるＡＩにとって、私たち中学生の宿題など簡単なのかもしれません。ＡＩを使ってしまえば、この作文の内容を考える時間も数秒で済んだはずです。ただ、「ＡＩに質問して答えを得る」という行為は、本当に私自身のためになっているのでしょうか。

私がＡＩに違和感を覚える理由、それはＡＩには人間のような「体」と「感情」がないからです。現在、私は陸上部で高跳びに挑戦しています。跳ぶ時のコツをＡＩに聞くと文字で指示が来るだけで、実際に目の前で動きを見せてくれるわけではありません。私の動きを見て「そこをもっとこうしてみて」とリアルタイムで伝えてくれるのは、人間にしかできないことです。友達や先生に跳んでいるところを見てもらい、一緒に試行錯誤する過程があるからこそ、目標の高さを超えたときの喜びや、思うようにいかなかったときの悔しさを分かち合えます。この体験は、ＡＩには絶対に再現できません。また、ＡＩには私たち人間と同じような感情もないはずです。私たちが問いかけた内容には、肯定的に接してくれます。例えそれが間違ったこと

だとしてもアドバイスをくれたり、応援してくれたりすることもあります。皆さんは、信頼する友人に悩みを相談した際、「ＡＩに聞いてみたら？」とだけ返されたらどうでしょうか。私は学校生活の中でそんなことを言われたら、とても寂しい気持ちになります。裏切られたと感じるかもしれません。私は友人と顔を合わせ、感情を共有しながら話している時間がとても好きです。高跳びの練習も、友人との悩み相談も、どちらも画面越しや計算だけでは得られない「目の前の人との対話」です。だからこそ、ＡＩが生活に浸透してきた現代において、私たち中学生は人と人との関わりをより一層大切にしなければいけないと感じました。

ＡＩは正しく使えば便利ですが、楽をするために頼りきってしまうのは、自分自身の成長や考える機会を奪うことになってしまいます。今、私たちがするべきなのは、ＡＩに頼り切りになって考えることをやめることではありません。自分の頭で考え、行動し何かを感じるための一つの道具として正しく使いこなしていくことです。私もＡＩを使うときには、依存するのではなく、自分自身の考えを深め、生き方を豊かにするためのツールとして向き合っていきたいです。





国際協調のためには

矢祭中学校　二年　植田　結菜

Ｈｅｌｌｏ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ！Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｙｕｎａ　Ｕｅｄａ．Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ！

私は英語が大好きです。英語との出会いは四歳。習い事として始めた英会話は、歌ったりゲームをしたり、体を使って学ぶもので、外国の人や先生に自分の思いを伝えられる喜びに、私はすぐに英語が大好きになりました。中学生になってテストの点数が気になるものの、今でも英語の授業はとても楽しく、家での自主学習でも英単語や構文を調べたり、繰り返し書いて覚えたりして頑張っています。

そんな私が以前から楽しみにしていた行事があります。それは天栄村にあるブリティッシュヒルズでの異文化交流研修です。ブリティッシュヒルズはその名の通りイギリスの文化を体験できる施設です。私たちはゲームを取り入れた英語研修やスコーン作りなど様々なプログラムに挑戦しました。ここではスタッフの方と全て英語でコミュニケーションをとります。外国の方との本格的な英会話は学校や日常生活では経験できない緊張感と楽しさがありました。しかし一方でお互いに理解し合うことの難しさも感じました。英語が苦手な友達は「何を言っているのか全然分からない。」と終始不安そうでした。言語や文化、風習の異なる人たちとお互いに理解し合い交流を図るためには、それ相応の知識や理解力が必要だと実感しました。資源や技術力を補い合い、災害や困難を乗り越えるために助け合う。そんな社会の実現のための「国際協調」は、やはり難しいことなのでしょうか。

先日講演会で、現在ナイジェリアのナショナル野球チームの監督を務める友成晋也さんのお話をお聞きしました。友成さんは長年アフリカの多くの国々で野球を広める活動に携わってきました。そして今もアフリカの発展のために活躍されています。私は「アフリカ」と聞いたとき「発展途上の貧しい国々」「不衛生な場所」「人種差別」というイメージが最初に思い浮かびました。しかし、友成さんが紹介するアフリカは、実に近代的な街並みであり、アフリカの人々は気さくに声をかけてくるフレンドリーな人たちでした。そして何よりも自分たちの国のことを熱く語り、日本のことをよく勉強していました。

私は友成さんの話を聞くうちに、自分は何も知らないということに気が付きました。アフリカのことはもちろん、自分の国

日本についてだって知らないことばかりだということに。友成さんは私に「『知らない』ということが『誤解』を作り出す。」ということを教えてくれました。切り取られたある一面だけを見て、アフリカに対して勝手に負のイメージを持ち、「貧困と差別」に苦しむ場所だと思い込んでいた自分が恥ずかしくなりました。

今、世界では多くの人々が紛争の中で苦しんでいます。私はブリティッシュヒルズでの研修と友成さんの講演を通して、言葉や文化が異なる国際社会において、協調していくためには、人と人とがお互いに興味や関心を持って、「知る」努力をすることが重要だと考えるようになりました。「知らない」ことから生まれる誤解や偏見は簡単には消せません。偏った情報や自分勝手に決めつけてしまった苦手意識や悪い印象は、互いに歩み寄ることを妨げてしまいます。相手の立場に立って物事を考え、真実を自分の目で見極める、そうして相手を正しく理解しようとする態度が必要なのではないでしょうか。

私は英語が大好きです。これからも英語で様々な国の人たちと関わってみたいと考えています。その日のために、私は普段から身の回りの人たちを理解する努力を続けていきたいと思います。



「頑張る」ということ

矢祭中学校　三年　本田　瑛士



「兄に勝てなかった。」

中学校最後の県中体連。私の胸はやり切った充実感ではなく、激しい悔しさでいっぱいでした。これまで私の前には、いつも私の一歩先を行く兄の姿がありました。陸上競技を始めた時から、私の目標は兄を超えること。兄に追いつき、追い越す。そのために誰よりも練習をしてきました。それこそ朝早くから夜遅くまで。どんな時でも「兄を超える」という目標を達成するために自分を追い込んできました。そして迎えた大会当日、私は男子二、三年一五〇〇Mに出場しました。結果は五位。惜しくも東北大会出場を逃してしまいました。兄を超えることができなかった。その瞬間、私の心にぽっかりと大きな穴が空いたような大きな虚しさに襲われました。どんなに頑張っても、どれだけ走っても、結果が出なければ意味がない。「自分がしてきた努力は全て無駄になった。」そう思うと、悔しさと情けなさで涙が止まりませんでした。

大会から数日が経ち、私は再び走り出しました。全国大会出場をかけた新たな挑戦があるからです。今、冷静になって自分自身と向き合った時、「自分がしてきた努力は全て無駄になった」という考えは間違っていたと思うようになりました。なぜなら、「兄を超える」という目標を達成するために、必死に努力したという経験が紛れもなく残っているからです。もし、私が目標もなく、陸上競技に適当に取り組んでいたら、どうだったでしょう。本気で挑んだからこその悔しさ。それは間違いなく自分の成長の証だと胸を張って言えるのです。限界まで努力した時間こそが、私の精神を鍛え上げ、再び立ち上がる強さや新たなステップに一歩を踏み出す勇気を培ってくれたのだと気づきました。

現代の社会、特に私たちの世代において、「頑張らなくてもいい」「無理をしてまで努力する必要はない」という風潮があります。

確かに、努力が必ずしも報われるわけではありません。私のように、どれだけ努力をしても結果として失敗に終わることもあります。さらに深刻なことに、自分自身や状況を変えようと頑張った結果、心を病み、体調を崩し、果てには死を選んでしまう人もいます。そんな悲劇を生まないために、努力することに悩み苦しんだり、失敗して傷ついたりするよりは、危険を回

避し、結果が見えている安全な道を選び、効率を重視して徒労感を覚えることのないように。「逃げてもいいんだよ。」「そのままの君でいい」という言葉が、まるで免罪符のように世間にあふれています。

しかし多くの場合、人々はその言葉の意味を自分に都合のいいように受け入れているのではないでしょうか。最初から目標も持たず、より良い姿を目指して頑張ることをしなかったら、成功の喜びも、失敗から学び絶望から這い上がる強さも知ることはできません。それは人間としての成長を止め、ひいては社会の発展をも妨げるでしょう。失敗を恐れて努力を否定する社会は、一見優しいように見えて、実は若い人たちの可能性を狭めているのではないでしょうか。

「努力は裏切らない」という言葉の本質は、必ず成功するという意味ではありません。努力によって得た強さと経験が、決して自分を裏切らないという意味だと私は思います。私たちは、頑張ることを否定せずに、一人ひとりが本気で挑戦し、その努力を互いに認め合える豊かな社会を創っていくべきなのです。

私は、陸上競技で得た「悔しさ」を糧に、これからの人生を全力で歩んでいきます。私はこれからどんな困難にぶつかっても、努力を止めません。次こそは新しい舞台で、必ず兄を超えてみせます。





挑戦と勇気

福島県立白河高等学校　一年
鈴木　悠人

みなさんは、「挑戦する」と聞いたときに、どんなことを思い浮かべますか。期待に胸を膨らませる人もいれば、失敗を恐れて足がすくんでしまう人もいると思います。かつての私は、完全に後者でした。失敗して傷つくくらいなら、最初から何もしないほうがいい、そんな風に、自分の可能性を否定して、安全な場所からただ周りを眺めているだけの人間だったのです。

そんな私が、これまでの生活の中で最も大きな挑戦を決意したのが、生徒会選挙でした。

きっかけは、日々の学校生活の中で感じていた、小さな疑問や違和感でした。「もっと生徒一人ひとりの声が届く学校にしたい」「みんなが主役になれる行事を作りたい」。自分の心の中にあるたくさんの理想を、実現するために行動したいと思いました。しかし、そのためには、生徒会役員という責任ある立場に立つ必要があります。そしてその立場になるために全校生徒の前で演説をし、選挙を勝ち抜かなければなりません。

「もし落選してしまったら、みんなに笑われるかもしれない」「自分なんかに生徒会を引っ張っていくことはできるのだろうか」。立候補の締め切りが近づくにつれ、不安と恐怖が波に襲われ、私の心は激しく揺れ動いていました。

そのとき、ある先生の言葉が私の背中を押してくれました。「挑戦することそのものに意味があり、その挑戦した勇気が大きく成長させるんだよ」。

私はその言葉を聞いてハッとさせられました。私は選挙に当選できるかどうかばかりを気にして、自分が当選して何をしたいかという目的を見失っていました。学校を良くしたいという強い思いがあるなら、逃げ出すわけにはいかないと思い、私は立候補用紙に名前を書き、提出しました。

そして立候補者演説の日、私は数百人といる全校生徒の前に立ち、私はとても緊張してしまいました。しかし私は一週間以上かけて作った演説の台本、そして学校を良くしたいと思って演説すれば、自分の思いを伝えることができると思い自信をもって行うことができました。

そして開票の日。生徒会選挙で勝ち抜き、当選したとき、嬉しさ以上に、私を信じて一票を投じてくれたみんなへの責任感、そして何よりも、「勇気を持って一歩を踏み出して本当によかっ

た」という思いが溢れてきました。

この経験を通じて、私は大切なことに気づきました。それは、なにかをするための「勇気」とは最初から心の中にあるものではなく、恐怖を乗り越えて「挑戦」しようと決意した瞬間に、後から湧き上がってくるものだということです。もし私が、失敗を恐れて立候補を諦めていたら、当選の喜びを知ることはもちろん、自分を信じて投票してくれた人の期待に応える責任に気づくことも、自分に自信を持つこともできませんでした。安全な場所に留まっているだけでは、見ることのできる景色は一生変わらないのだと思います。

いま、世界は絶えず変化し続けています。私たちの将来は複雑で予測不能なものになって行くのだと思います。進路の選択、人間関係、新しい環境など、私たちはこれからも多くの困難や壁に直面することがあるはずです。そのたびに、不安に襲われることがあるかもしれません。

だからこそ「挑戦する勇気」が必要だと思います。失敗は終わりではありません。挑戦を諦めること、そして失敗を恐れて何もしないことこそが、本当の失敗なのだと思います。たとえ思うような結果が出なかったとしても、挑んだという事実と、その過程で得た経験は、必ずこれからの将来に役立てることができるのだと思います。

みなさんも、心の中に眠らせている「やってみたいこと」はありませんか。どんなに小さなことでも構いません。一歩を踏み出す勇気を持って、未来を変える挑戦を、今ここから一緒に始めていきましょう。



ＡＩ時代に学ぶ意味

学校法人石川高等学校　一年
菊地　心絆

近年、ＡＩは私たちにとって身近な存在になっています。分からない問題を質問すればすぐに答えてくれたり、文章を作ってくれたり、画像を作ってくれたりもしてくれます。では、私たちは今この時代に、なんのために勉強しているのでしょうか。今までは人間がしていたことでも、今はＡＩで補えるのであれば、わざわざ自分で覚えたり、考えたりする必要はないと思いませんか？

ただ、ここでみなさんと考えたいことがあります。それは、「ＡＩは私たちの人生の責任を背負ってくれるのか」ということです。友達との付き合い方や自分におすすめの進路など、どんなことを相談しても、ＡＩは自分に寄り添った答えを出してくれます。しかし、それを受け入れるかどうか、最終的な判断をするのは自分自身なのです。

そのため、「勉強をすること」とは、問題を解いて正解を求めるだけではなく、世界を理解し、自分で判断するための知識や技能を、「自分の中に蓄えていく」をことだと考えます。例えば、国語を学べば、他人の考えを理解したり、自分の考えを言葉にしたりできます。数学を学べば、根拠をもとに考え、本当にそうなのかということを確かめる能力がつき、理科を学べば、身の回りで起こるあらゆる現象を理解する力を身につけることができます。

たしかにＡＩはとても便利な存在で、私自身も、分からないことを調べたり、考えを整理したりするときにＡＩをよく使います。しかし、ＡＩが出した答えが必ずしも正しいとは限りません。そんな時私たちに知識がなければ、その答えが正しいのか、間違っているのかを判断することもできません。そのため、ＡＩを使わないことが大切なのではなく、ＡＩが出した答えを、自分の知識や考えを使って確かめることが大切です。物事を考えるための土台となる知識がなければ、私たちは何事も、自分で判断することができなくなってしまうのです。

勉強とは、ＡＩに勝つためのものではありません。答えを疑ったり、複数の情報を比較したりして、そもそも何を考えるべきかを見つけることが勉強なのだと思います。また、勉強することで、ＡＩに「何をどう聞けばいいのか」を考える力も身につくと思います。

つまり、私たちが勉強をするのは、正しい答えを出せる人になるためではなく、自分で問いを持ち、自分で考え、自分の人生を、責任をもって選べる人になるためなのだと考えます。

では、皆さんは今、何のために勉強をしていますか？テストのため？親や先生に言われたから？これらももちろん理由になります。しかし、その先には「自分の人生を自分で選ぶため」という最も大切な意味が込められているのではないでしょうか。

ＡＩは、「私はどう生きたいのか」という問いを、私の代わりに引き受けることができません。ＡＩが答えを出してくれる時代だからこそ、私は、自分で問いを持てる人になりたいです。ＡＩに「答え」を任せることはできても、「生き方」までは任せてはいけません。だからこそ、この機会に皆さんも、自分自身としっかりと向き合い、ＡＩや勉強との付き合い方を見直してみてはいかかでしょうか。

（※大会当日ご欠席のため、写真の掲載はございません。）





ふるさと

福島県立光南高等学校　二年
熊田　紗也香

みなさんはふるさとと言われて何を思い浮かべますか？山や川、街並み、お祭り、学校、家族、友達、考えるだけでもたくさん出てきます。

私は小学生のころ「矢祭町は何もない町」と思うことがありました。友達と遊びに行くところも限られていて、有名な観光地は多くはない、しかも、都会のように大きな建物があるわけでもない。テレビなどで都会の様子が流れてくるたびに「都会にはいろいろなものがあっていいな」と思っていました。

しかし、中学生高校生になるにつれてあることに気づきました。季節によって変わる山の景色、毎日通る通学路の変化、地域の方々との交流。小さいときに参加した天王祭もあります。普段当たり前すぎて気づくことができていなかったものがたくさんあります。

私は中学生の時、部活動で図書館部とデジタル部に所属していました。これらは、町役場や地域おこし協力隊の方が立ち上げた部活動です。また、これらの活動は、町民の方とたくさんふれあうことができる活動が多いため、矢祭町の今を知ることもできました。

私は図書館部で学んだことがあります。それは「本と人間」です。私は手作り絵本コンクールの審査に参加したことがあります。このコンクールには日本中からたくさんの応募があります。何百何千の応募のなかから選ばれるのはほんの一握りですが、これは矢祭を知ってもらう良い機会だと思います。しかし、絵本コンクール以外でもったいない図書館が活動しているのは皆さんご存じですか？各地域の公民館に行き絵本の読み聞かせを行ったりしていますが来るのは少人数です。本の街といいながら全然本に興味がない人が増えてしまっていることが残念です。どれだけＳＮＳで発信をしても興味がなければ流してしまう現状です。今は漫画も小説もデジタルになっています。そのため、外に出て本を借りるという行動が面倒くさいと思われてしまいます。

しかし、私は思いました。その面倒くさいという気持ちを変えてしまうイベントさえ作ってしまえば少しでも町民からの利用率が向上するのではないかと。もっと漫画やシリーズものを本の入荷を増やしたりするなど利用率の向上に向けた工夫はあ

るはずです。

そして、私はもう一つの部活デジタル部にも所属していました。デジタル部は町民のみなさんが抱えているデジタルへの不安を解決したり、デジタルの種類や怖さを学びその知識でほかの誰かを助けたりすることができるようになる部活動です。私は第一期生でＩＣＴアドバイザーの認定を町長からいただくことができました。現にこの部活動で私は光南高校の特色選抜で合格することでき、その際にこれからもデジタルへの不安を持っている方を助けられる人を増やしていってほしいといわれました。この部活に入って損はないと思います。もし、将来公務員になったら作業するのはＰＣです。タイピングがわからない、ＷｏｒｄやＥｘｃｅｌの使い方が分からない方々に簡単に素早く教えることができるようになります。これからのデジタル化社会に特化した部活だと思っています。今は待会室での活動もしておりスマホ相談会も行っていると聞いています。

私のように中学校生活だけでたくさんの町民の方々のふれあいや話し合ってきて知ったことを次の世代にもつないでいくことが大切だと感じました。いきなり大きなことをする必要はありません。地域の行事に参加してみたり、矢祭の魅力を友達と話してみたりそんな小さい行動も地域が活性化する第一歩となります。

最初にいったとおり「矢祭町は何もないまち」ではありませんでした。

「当たり前すぎてきづいていなかっただけ」です。これからも私は自分のふるさとを知り大切にしていきたいです。そしていつか自分が矢祭を離れることになったとしてもここが私の故郷ですと胸をはって言えるような人になりたいです。



I could not run as much as my teammates, and I easily lost my breath during matches. I was later hospitalized, and the doctor instructed me to stop playing soccer.
I was always good at sports, but now I couldn't even stand at the starting line of fitness. I cried every day. I faced the reality that my condition would not heal through hard work. Before, I thought I could overcome anything with a positive mindset, but it was no longer possible. I felt so frustrated with myself.
I went for a checkup and I saw many people who were fighting conditions worse than mine. Some could not leave their hospital beds and others couldn't even walk. Being there, I realized how lucky I am. Still being able to go to school, do other things that I like. Something I almost took for granted. I also learned that my heart medical records were used to assist other patients. I was so happy to know that even with all that was happening I was helping others in some way.
Through this experience, I realized that not being able to play soccer wasn't the end but that I could help my teammates in other ways, by becoming a coach, a trainer or an assistant. This experience has made me realize that the world is much bigger, and while I may no longer be able to play soccer. The world is full of other grand experiences that even in my condition I can be a part of. In life we will come across hardships, some of you may already be in the middle of yours but as the saying goes "the brave may fall but never yield". This is to say falling is not the end, as opportunities to rise will come again.
If I were to say I'm not sad about not being able to play soccer anymore, that would be a lie. But I believe that with determination, focus and passion I can do other things without fear. I know I will find a new passion and when I do I will work hard at reaching the highest level.



Beyond the Soccer Field

Yamatsuri JHS Mashiko Ryua

I play soccer. I started when I was in the second grade. At first, I didn't like it. Going to practice was painful for me. Around that time, COVID spread everywhere. Soccer was canceled and it was the best news ever for me. Two life changing moments made me fall in love with soccer.

The first event was my experience in a match. After COVID ended, I went back to soccer. One day, I was chosen to play against the older teammates before their retirement. I played for just a short time, and we lost. I felt so frustrated that I hadn't done enough to help my team win, so I started to practice more and strangely soccer started to become fun for me.

The second event was the Qatar World Cup. The whole world was excited. I wasn't interested before, but decided to watch the match. It was a match between Japan and Germany. Everyone expected Germany to win, but Japan got the victory. Watching this match I started thinking how wonderful it would be if I too could play on a grand stage like this. These two events set a fire within me. After that, I gave all my passion to soccer. I was selected to join the prefectural team. My hard work was finally showing results. I was sure I would continue playing in high school and even as an adult. But then, a big wall stood in my way.

I was born with a heart condition called Pulmonary Valve Stenosis (a problem with the heart valve). It only started to affect me right after I became a third-year junior high school student. I started having irregular heartbeats and shortness of breath in my daily life. Soon, it started to affect my playing.

きないという現実に直面したからです。以前は、前向きな気持ちさえあれば何でも乗り越えられると思っていました。しかし、もうそれは通用しませんでした。自分自身に対して強い悔しさを感じました。

その後、検査のために病院へ行き、そこで私よりも厳しい状況と闘っている多くの人々を目にしました。病床から離れられない人や、歩くことさえできない人もいました。その場所に身を置いたことで、自分がどれほど恵まれているかに気づかされました。今でも学校に通い、他の好きなことができるという、今まで当たり前だと思っていたことのありがたさに気づいたのです。また、私の心臓の医療記録（カルテ）が、他の患者さんを助けるために役立てられていることも知りました。大変な状況の中にあっても、自分が何らかの形で誰かの役に立っているのだと知り、とても嬉しくなりました。

この経験を通じて、私は「サッカーをプレーできないこと」は終わりではないのだと気づきました。コーチやトレーナー、アシスタントなど、別の方法でチームメイトを支えることができるのだと。自分自身でプレーすることはできなくなっても、世界はもっとずっと広く、この病気を抱えた自分であっても関わることができる素晴らしい経験が溢れているのだと実感しています。人生の中で、私たちは様々な困難に直面します。皆さんの中にも、今まさに困難の真っ只中にいる人がいるかもしれません。しかし、「勇者は倒れることはあっても、決して屈しない」ということわざがあるように、倒れることは終わりではなく、再び立ち上がる機会は必ず巡ってきます。

もうサッカーができないことについて「悲しくない」と言えば嘘になります。しかし、強い意志と集中力、そして情熱があれば、恐れることなく他のことにも挑戦できると信じています。私は必ず新しい情熱を見つけられると確信しています。そしてそれが見つかったときには、最高のレベルに到達できるよう全力で努力していきます。ご清聴ありがとうございました。



（日本語訳）

サッカー場を越えて

矢祭中学校　増子　琉愛

私はサッカーをしています。始めたのは小学２年生のときでした。最初は好きではありませんでした。練習に行くのは私にとって苦痛でした。その頃、コロナウイルスが各地に広がりました。サッカーの活動が中止になり、それは当時の私にとってこれ以上ないほどの朗報でした。しかし、２つの人生を変える出来事が、私をサッカーに夢中にさせたのです。

１つ目の出来事は、ある試合での経験でした。コロナ禍が明けたあと、私はサッカーに戻りました。ある日、先輩たちの引退前の試合の対戦相手としてプレーするよう選ばれました。私はほんの短い時間しかプレーできず、私たちは負けてしまいました。チームの勝利に貢献するだけのプレーができなかったことが、とても悔しかったのです。そのため、私はもっと練習するようになり、すると不思議なことに、サッカーが楽しくなり始めました。

２つ目の出来事は、カタール・ワールドカップでした。世界中が熱狂していました。それまでは興味がなかったのですが、試合を観てみることにしました。それは日本とドイツの対戦でした。誰もがドイツの勝利を予想していましたが、日本が勝利を収めました。この試合を観て、「このような大きな舞台で自分もプレーできたら、どれほど素晴らしいだろうか」と考え始めました。これら２つの出来事が私の心に火をつけました。それ以来、私はすべての情熱をサッカーに注ぎました。そして県選抜チームのメンバーにも選ばれました。私の努力が、ついに結果として表れ始めたのです。自分は高校でも、大人になってもサッカーを続けていくのだと確信していました。しかしその時、大きな壁が私の前に立ちはだかりました。

私は生まれつき「肺動脈弁狭窄症」という心臓の弁の病気を患っていました。その影響が出始めたのは、中学３年生になってすぐのことでした。日常生活の中で不整脈や息切れを感じるようになったのです。やがて、それは自分のプレーにも影響を及ぼし始めました。チームメイトと同じようには走れなくなり、試合中すぐに息が上がるようになりました。私はその後入院することになり、医師からサッカーを辞めるようにと言われました。

私はずっとスポーツが得意だったのに、今や体力作りのスタートラインにさえ立つことができなくなりました。毎日泣きました。自分の病気は努力だけではどうにもで

編集後記

皆様には大変お世話になり、心より感謝申し上げます。おかげ様で多くの方々にご来場いただき、盛会のうちに終了することができました。今後とも変わらぬご協力を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

令和八年十一月　発行
発行者　矢祭町青少年育成町民会議
事務局　矢祭町教育委員会教育課


やまつり